

福島県における子宮頸部細胞診異常例に対する HPV タイピングの検討

○ 古川 茂宜^{1,3)}、佐藤 美賀子¹⁾、神尾 淳子¹⁾
森村 豊²⁾、添田 周³⁾、渡辺 尚文³⁾、
西山 浩³⁾、藤森 敬也³⁾、鈴木 仁¹⁾

- 1) 公益財団法人福島県保健衛生協会、
- 2) 北福島医療センター 婦人科
- 3) 福島県立医科大学産科婦人科学講座

(目的) 福島県では子宮頸部細胞診(以下 EC) 異常所見例に対して子宮頸がんの原因とされるハイリスク HPV-DNA の検出検査を施行し、検診の効率化を試みてきた。今回は、EC 異常所見例に感染する HPV 型を明確にし、精密検査結果と HPV 型の関連を調査することを目的として検討を行った。

(方法) 県内の協力施設にて EC 異常所見例 342 例を対象として、精密検査時にコルポス

コープ下組織診と HPV 型別検査を施行した。
要経過観察例においては 3 か月後に EC、6 か月後に EC と HPV 型別を再検した。初回あるいは経過観察中に要治療に至った症例は、その時点で追跡終了とした。型別については、
16/18/31/33/35/45/52/58 を超ハイリスク、
39/51/56/59/68 をハイリスク、それ以外をローリスクに分けて検討した。

(結果) 342 例中 1 つの型のみの感染例は 182 例、複数型の感染例は 138 例、陰性例は 22 例であった。1 つの型のみの感染例では 52 型感染が 40 例 (22%) と最多であった。1 つの型のみの、複数型、いずれの感染例でも、初回精検での超ハイリスク陽性例に CIN2 以上の強い病変が高率に認められた。さらに 3 例の 82 型感染例で CIN3 以上の病変が認められた。初回検査において、超およびハイリスク HPV であった 50 例について HPV 型別を再検した結果、HPV が消失した 7 例では細胞診が陰性化した。が、感染している型の変化と病変進行との関

連は不明であった。

（考察と結語）超ハイリスク感染例では経過観察が困難であった。また82型の感染例で強い病変が認められたことから、ハイリスクと同等の注意が必要であると思われた。型別再検と細胞診異常との関連については不明であったが、さらに症例を蓄積し解析を進めたい。